

# 全自者協ニュース

JAAS (Japanese Association of Autism Support)

- ・全自者協ニュース／第45号／2015年（平成27年）3月
- ・発行所＝全国自閉症者施設協議会・事務局 ☎ 097-578-0818
- ・発行人＝五十嵐康郎・編集人＝宇治原誠・URL <http://zenjisyakyo.com>

## 行動障害が著しい人への支援体制に向けてのひとつの取組み

独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園  
志賀利一

平成25年より、都道府県地域生活支援事業のメニューに「強度行動障害支援者養成研修」が加わりました。平成25年・26年度において、国ならびに都道府県研修で同「基礎研修」が開催され、推計で1,000人程度の研修修了者が誕生しています。さらに、平成26年度より、同「実践研修」もスタートし、その基本的なカリキュラムが厚生労働省より示されています。平成27年度以降、さらに多くの方が、強度行動障害支援者養成研修を受講する予定です。

のぞみの園では、強度行動障害支援者養成研修の国研修の開催と、各都道府県で開催される研修のサポート・デスクの運営、さらに研修実施後の様々な意見を集約し、研修プログラムの充実ならびに必要に応じてカリキュラム改訂の提案を行っていきたくと考えております。

自傷、他害、異食といった、自らの健康を著しく損ねる行動や周囲の人の暮らしに著しく影響を及ぼす行動が頻繁に見られる強度行動障害がある人が、全国のあらゆる地域で生活しています。そして、重い知的障害がある自閉症の人が、この強度行動障害になるリスクが高いと言われるようになってから、四半世紀が過ぎました。

このような人に対する国の施策としては、強度行動障害特別処遇事業を皮切りに、各種加算や行動援護の仕組みが誕生しました。しかし、行動障害ゆえにサービスが利用できない事例は無くなりません。さらに、不適切な支援から虐待、暴行・傷害事件に発展する、非常に残念な事例も減ることがありませんでした。そこで、虐待防止法の施行にあわせ、強度行動障害に対する適切な理解と対応を目的とした人材養成の一環として、強度行動障害支援者養成研修が誕生しました。

研修プログラムの作成にあたり、のぞみの園が事務局となり、強度行動障害研究に先駆的に

取り組んできた施設ならびに全自者協の会員施設の協力を得て、検討委員会とその作業部会を設置しました。さらに、学識研究者も加わり、研修の全体像とめざすところについて、繰り返し議論を行ってきました。重要な議論は、受講者のイメージと年間の受講者数の見込についてでした。ちょうど、訪問系サービスの対象拡大の検討時期であったこともあり、結論としては、強度行動障害支援者養成研修は、知的障害を対象とする障害福祉サービス等で1年程度従事した経験のある人材を想定し、広く多くの人に「もっとも基本的な内容を理解してもらう」研修として位置づけました。また、非正規職員が障害者虐待の加害者となる事案が増えてきたことも結論に影響を及ぼしました。さらに、シンプルでわかりやすい研修プログラムは、経験豊富な人材にとっても、自らの実戦経験を振り返る良い機会になるとも考えました。

研修プログラム個々の内容は、決して目新しいものではありません。これまでいくつかの団体で、自閉症や行動障害のある人の研修として充実したプログラムを実施していたものを、整理したに過ぎません。また、地域の実情を反映した実践報告や家族等の想いを伝える時間も加えました。全国の多くの地域で、この研修の開催をきっかけとして、強度行動障害者のより良い支援体制の構築に向けて、実際の取り組みが行われることを期待しています。

もちろん、初級レベルの研修だけで、強度行動障害者に対する支援が充実し、豊かな生活が保証できるものではありません。地域あるいは都道府県、国レベルにおいても検討すべき課題が、たくさん残っています。全自者協の会員施設の皆様には、強度行動障害支援者養成研修へのご協力と、積み残した多くの課題に対する提言をいただけますよう、よろしく願いいたします。

# 第28回 全自閉症者施設協議会熊本大会報告

三気の里 施設長 松田 健

平成26年11月13日(木)、14日(金)の両日、熊本県熊本市の「メルパルク熊本」に於いて、第28回全国自閉症者施設協議会熊本大会が開催され、全国から438名の参加者があり、2日間にわたって専門知識を深め、相互の交流を図ることができました。毎年全国大会を全国9のブロックの会員施設が持ち回りで企画・開催しています。今年度の第28回は九州・山口・四国ブロックの担当となり、三気の里が主幹施設として運営にあたりました。

全国自閉症者施設協議会は、「自閉症者の人権と生きるための発達保障、自立、社会参加の実践と研究の推進、さらに、これに参画するものの研鑽と相互交流を促進すること」を目的として、昭和62年(1987年)に発足し、30年近い歴史を重ねてきました。そこには語り尽くせないほどの苦悩や喜びがご本人・ご家族・支援者にあったはずで、また、その間、

様々な法律や制度の改正の下、その都度、時代に応じた対応を迫られてきました。特に近年は、障害者虐待防止法や障害者権利条約の施行をはじめ、障害者権利条約を批准した変革はご承知の通りです。時代に沿って30年近く第一線で実践を積み重ねてきた自閉症専門施設として、ノウハウの還元を第一義的に置きつつ、自閉症者の生涯にわたる包括的な支援のあり方を考えたいという思いから、今大会では「自閉症支援の過去を見つめ、現在を検証し、未来を見据える」をスローガンとしました。

1日目は、会に先立ち、偉大な業績を残し逝去された石井哲夫先生へ哀悼の意をこめ黙祷を捧げました。開会式後サブライズゲストとしてくまモンが登場し、くまモン体操を披露してくれました。

行政説明では、厚生労働省発達障害対策専門官 日詰 正文氏より「厚生労働省における発達障害

支援施策」について丁寧で分かりやすい説明がありました。強度行動障害に関する施策については既に動き出しており、今後さらに力を入れていく方向性で進んでいるとのことでした。続いてリレートークIとして、全国自閉症者施設協議会 五十嵐康郎会長より「自閉症支援の原則と提言」、三原憲二副会長より「ある事例を通して考える」と題して講演がありました。

基調講演では、九州大学人間環境学科客員教授、前フエイエットビルTEACHセンター長 スティーブ・クルーパー氏より「施設における自閉症の人達に対する関わりの新時代へ：最初に考え、実践すべきこと」の講演が、熊本大学神経精神科発達障がい医療センター 特任助教 田中 恭子氏の通訳によって行われました。「自閉症の成人を社会の一部としてみるならば、私たちの子どものように彼らを守り、慈しむでしょう。自閉

症の成人を社会の一部とみないならば、彼らとは離れて暮らし、誰かに世話を任せるでしょう。そうすれば、彼らの可能性や私たちの人間性は失われていくことでしょう。」の言葉は深く胸を打ちました。

2日目の午前中は、以下の5つの分科会が行われ、それぞれのテーマで意見交換が行われました。

第1分科会「当事者家族と支援者の話から自閉症支援のあり方を考える」→過去から学び、求められる支援を探る  
第2分科会「高齢化に伴う自閉症者への特化した支援と成年後見制度のカタチ





を考える」～高齢化した自閉症者への支援の課題と親亡き後の備えについて」第3分科会「強度行動障がいのある人の支援を考える」～長期的、包括的に生活を支えていくには」第4分科会「自閉症スペクトラムのある人の支援技法を考える」～日中活動を充実させるために」第5分科会「自閉症支援の専門性と権利擁護を考える」～我々の支援の根本にある葛藤について～

午後からリレートークⅡでは、ひらきの里松本 正施設長より「支援を考える」、北摂杉の子会 松上 利男常務理事より「今、私たちに求められているガバナンスとは」と題し講演がありました。続いて鳥取大学大学院 医学系 研究科臨床心理学講座教授 井上 雅彦氏より「自閉症のある人のライフステージを通じた支援」今、必要とされている支援について考える」と題しての記念講演がありました。本人のその日の気分や調子によっても変化するので、個別の作業がいいか、集団での作業がいいかの自己選択への配慮をすべきとの言葉が印象的でした。弱みにのみ着目するのではなく、強みを生かした当事者参加のシステム作りをコーディネートすべきであるとの話がありました。

「来てよかった」と思っていただけのような会を目指しました。そのミッションは大方達成できたとの手ごたえがありました。しかし、会場が手狭でご迷惑をおかけしましたことを、紙面をお借りしてここにお詫び申し上げます。最後に、ご後援を頂きました熊本県、熊本市をはじめ、多くの団体・関係者の皆様方に、この場をかりて改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。次回、平成27年度の大会は神奈川県にて開催される予定です。

## 「自閉症支援の原則と提言」

全国自閉症者施設協議会 会長 五十嵐 康 郎

30分という短い時間で、あまり具体的なお話はできませんが、私が半世紀自閉症の方たちと関わってきた自閉症の方たちから学んできたことを要約して自閉症支援の原則と提言と題してお話をさせていただきます。と思っています。

まず自閉症支援の原則ですが、自閉症支援においては関係性の視点が非常に重要だと考えています。これにつきましては、若いころに石井哲夫先生から関係性の視点の重要性を学びました。それまではどちらかというと、私は訓練・指導、操作的な手法で関わっていました。そういう中において、実は自閉症の人たちの行動というものは、環境や支援者の支援のありよう、態度と非常に密接な関係があると考えるようになりました。従いまして、関係性の視点がまさに自閉症療育の鍵だと考えています。

今回は基本的な事しか申し上げ

られませんが、療育において安心感と信頼関係が非常に重要ではないかと思っています。まず、安心感がなければ、療育や教育は成立しないわけです。そして、信頼関係があつてはじめて、利用者の方に何かを伝えたり、教えることができるわけです。

そして更に、私の若いころは行動療法の最盛期といいますが、行動療法ですべての課題が解決すると言われた時代でした。そして動作法、構造化、あるいは感覚統合、ジェントルティーチング等々、様々な療育理論や方法論がありますが、私はこれまで自閉症の方たちと関わってきた中で、それぞれの療育技法や方法論は、価値のあるものだと、一定の有効性があると考えています。

しかしながら、どれかの療法をもって、オールマイティーということはないと考えています。安心感と信頼関係が自閉症療育の基盤でありますし、特定の理論や方法

論に捉われることは療育上非常にマイナスだと考えています。私は自閉症療育や支援は実験室や設定された場面のみで行われるものではなく、日常の生活場面の中で利用者の個性や性格、能力、年齢、場面、そして支援者の力量や年齢、利用者との関係性、その他諸々の条件に応じて関係性の視点に立って支援者としての経験と知識を生かしながら、全知全能を傾けて即興的に、心理劇における最良の補助自我としての役割を演じていくというのが、自閉症療育の真髓だと考えています。

日本においては、スーパービジョンやチームワークがないがしろにされています。教育の世界、福祉の世界等、ほとんどスーパービジョンが存在していません。例えば今までシヨートステイ等でお受けした方が強度行動障害になった原因は、本人に何の断りもなく支援者の方針が一夜にして180度変わり、そのことによって利用者の方が混乱したケースがあります。

スーパービジョンとチームワークの欠如が、虐待、更には二次障害を生んでいると私は考えて

います。そもそも、スーパービジョンの重要性やスーパーバイザーを養成することへの認識が欠けている、不十分だと考えています。スーパービジョンを得て事例検討を重ねていく中で、支援者の力量がついていくと考えています。

私は自閉症療育のコペルニクスの転回ということを常々申し上げています。利用者の方の課題や問題行動のみを取り上げる視点からは、障害の重さが限界になってしまいうわけですが、実は行動障害を改善し、利用者の方たちの発達を保障するのは支援者の課題であって、支援者の気持ちや態度、関わり方を検証することで無限の可能性が開ける。利用者の課題にしてしまえば、そこでもう可能性は閉じられてしまうわけですが、例えば私、そして皆様方、おそらく支援者として十全ではないと思えます。やはりそれぞれに未熟さを持つているわけです。学ぶことはたくさんあるわけで、支援者として成長することによって、行動障害が改善し、利用者の発達を保障することができると考えています。

医療の世界では、医師の無知や

力量不足によって、治療に失敗して患者さんが亡くなったら過失を問われ、裁判沙汰になって医師免許を剥奪されかねないわけです。そこまで医療の世界は厳しい世界になっていくわけですが、どうでしょうか。私たちの世界は自分たちの力量を棚に上げて利用者の障害のせいにしてしまっていることが多いのではないのでしょうか。以前は行動療法を中心に訓練・指導と称されるものをやっていました。私も腕立て伏せ100回とか、腹筋100回とか、かなりスバルタ的な訓練もしました。そして何人かを就職させた経験も持っています。

そういう一方的に支援者が設定した目標に向けて彼らを訓練・指導していくというのが一つの立場です。そしてもう一つは、本人の人生や生きがいを大切にして、本人の気持ちや意志を尊重しながら、自己実現を目指す立場です。後者が今の私たちの立場ですが、体験上、どちらの考え方でも利用者の方が、この社会に一定程度適応して暮らしていくことは可能だと思っています。しかし、本人にとっては大きな違いではないで

しょうか、もし自分がその立場だったら、やはり私の人間性・主体性、自己実現を大切に見守って支援して欲しいというのが心情ではないかと思えます。

そういう中で自閉症療育の支援の原則として、まず一つ目は環境整備、これは40数年前に知的障害児施設の重度棟で、行動障害の激しい、重い知的障害を伴う自閉症の子どもたちへの支援として最初に取り組んだのが環境整備でした。環境整備は、専門性がなくともすぐに取り組めるのですが、案外なおざりにされがちな課題です。

二つ目は、当たり前の生活です。40年余り前の日本ではノーマライゼーションは一般的な考え方ではありませんでしたが、ごく当たり前の生活を実現しているというところで、小規模の生活、あるいは瀬戸物の食器を使うとか、あるいは地域の小中学校への就学や買い物等で地域に出ているようにするというような取り組みをしました。

三つ目は安心感と信頼関係、これが大変重要です。このことは絶対に対に外せないわけです。四つ目は

手ごたえのある暮らし、よく私たちの仲間の施設でも、特に重度の知的障害や行動障害のある方は、デイルーム等で、1日を無為に過ごしている。在宅でもそういう経緯がありました。そんな中で行動障害を惹起するというようなことがあるわけでして、彼らなりに手ごたえのある暮らし、これは私たちにとって同じです。彼らにとって生きがいとなる活動や生活をきちんと保障していくことが大変重要だと思っています。

五つ目は先ほど申し上げましたスーパージョーンとチームワーク、これによって支援の統一と共有を図る、このことも非常に重要です。Aという職員とBという職員が全く別な方針で関われば、これは混乱して当たり前なのです。知的障害児施設にいた経験から知的障害の方はある程度順応することができると思いますが、自閉症の方はそこが最も苦手なところですので、支援者が理念、方法論、価値観というものを統一して対応することが非常に重要だと考えています。

六つ目に、先ほど申し上げましたように、毛嫌いしたり、この療

育理論が最高、最善のものと考えるのではなく、様々な療育理論や技法に学ぶべきだろうと考えています。そして今、医療、脳科学が非常に進歩を遂げています。これまで分からなかったことが、次々と解明されています。そういうことから学ばなければならぬ。当然行動障害については薬物療法も活用すべきだし、ミラーニューロンや最新の脳科学の発見等の成果も十分活用していくべきだと考えています。

次に支援者へのメッセージですが、行動障害は本人だけではなく、関係者の課題だということです。これは既に申し上げた通りですが、例えば行動障害が激しいとき、もう投げ出したい、この人がいなければどんなに楽だろうと思うこともあると思うのですが、必ず道は開けると信じて、投げ出さずに逃げないで、愛情を持って向き合うことが大事だろうと、そしていつか他人に引き継ぐ日が来ることを意識すべきだと、特にこれは学校の先生方が、自分の考え方で指導して、担任が変わると全く違う考え方で指導する。そのことが原因で崩れるというケースがあ

ります。あるいは幼児・早期療育もそうです。私たちは利用者の方と生涯関わるわけではありませぬ。別の機関や次の世代に引き継ぐことを意識して関わるべきだろうと思います。

それから、個々の利用者の現状からスタートすることだと思います。支援者側で勝手に課題を立てて、そこに向けて利用者の方を訓練・指導するのではなく、個々の利用者の現状から、これは本当に私自身そのことを痛感した出来事

がありました。知的障害児施設にいた頃に学習を担当していたのですが、例えば「あ」と書いて読み方を教えて、次をやって、もう一度戻ってこれは「何と読むのかな」と聞いたら「わかんない」というのです。1+1とか2+3とかの簡単な計算も同じで大変苦労しました。その彼が卒園後に再会した時には働いて、毎日日記を書いて、お母さんの生活を支えていたのです。やはりその人その人の現状を無視して教育・訓練をしても、成果が上がらないと思いました。

そして人との信頼関係、折り合いをつける力を育てることが、自閉症療育において重要だと、つま

りどんなに障害が重くても、私は人との折り合いをつける力は育つと確信しています。そのことが非常に重要だということです。つまり、障害がなくても他者との信頼関係や折り合いをつける力が育っていないければ、平気で人を傷ついたり、人の物を取ったりするわけで、その人は不幸な人生を送らざるを得ないわけです。

先日、NHKで「君が僕に教えてくれたこと」というテーマで放送がありました。ご覧になられた方もたくさんいるのではないかと思います。それをきっかけに私は東田直樹さんの本を大体全部読ませていただきました。その本の中に、自閉症支援や療育の真髄に関わる、もちろんこの方が自閉症すべてを代表するわけではありませんが、ここには自閉症療育のみならず、人がより良く生きていく上において、非常に貴重なエッセンスがあります。「人に迷惑をかけるかわりは何かとしてやめさせてください」と彼はそう言っているのです。「我慢することは苦しくて大変ですが、その時に必要なのは周りにいる人の忍耐強い指導と愛情でしょう」さらに「僕たち



ていますが、原則的には知的障害の手帳ということで、全国共通の基準がありません。身体障害者手帳・精神障害者福祉手帳は法律に記載されていますが、療育手帳は厚生労働省の通知に基づいているために名称や対象が自治体間でまちまちになっています。現在、発達障害は精神障害者福祉手帳の対象となつているわけですが、発達障害が胎生期、ないしは出生期等の早期からの障害であることを考えれば、当然これは精神障害ではなく、療育手帳と一本化してその中に含めるべきではないか、制度の改正と併せてどこかで英断が必要ではないかと考えています。

それから大分県発達障害がい者支援センター連絡協議会を実施主体に、発達障害がい者支援センター「イコール」に事務局を置いて、平成18年から発達障害がい者支援専門員養成研修を実施してきました。既に140名を超える支援専門員が誕生しています。福祉関係は勿論ですが、教員の方、保育所・幼稚園、医療機関の方、最近は大の先生、行政マンや労働関係の方も受講しています。そういう多業種の方たちが座学のみでなく、

実務研修も含めた3年間に及ぶ長期の研修を受けて、支援専門員という資格を取って、支援専門員会を立ち上げて、生涯研修と連携を目的として、研修会や相談会、あるいは様々な発達障害・自閉症に関わる事業に協力し、スーパーバイザーとして活動しています。

これを国の制度として、全国の発達障害者支援センターを事務局に実施すれば、発達障害の理解と支援が飛躍的に向上すると思えます。今連携が叫ばれていますが、言葉だけが先走りしても実現できないわけです。実際にこういう地道な積み重ねによって、大分県では色々な関係機関の連携体制、あるいは自立支援協議会や個別支援会議で、支援専門員が顔を合わせることで引き継ぎや支援が深まるということが現実には起きているわけです。これをぜひ国の事業として位置付けていただきたいと思えます。

更に、強度行動障害、あるいは触法の方たちへの支援がこれからの大きな課題であろうと考えています。これに関しては、私たちの法人だけで20名を超える行動障害の激しい待機者の方がいま

す。その方たちを地域で生活できるように支援していこうということで、専門の棟を建てて、重度包括支援等を使って濃密な支援をして3年以内ぐらいの期間内に在宅、ケアホームあるいは施設等の通常の福祉制度の中で安定して暮らしていけるように取り組んでいきたいと考えています。

事業者数やサービスマ量は大幅に増えています。人口4万人ほどの豊後大野市においてもNPOや有限会社などが参入し、極端な事を言うとなかなか難しい人については奪い合いのような、そんな状況すらおきています。ですがそういった中で行動障害や触法などのリスクの高い方たちというのは、置き去りにされているのです。ここにきちんと対応していけるような制度なりビジョンが必要だろうと考えています。

最後になりますが、今こそ社会福祉法人の使命を果たす時だと、先般、各入所施設に平均3億円の剰余金があるという厚生労働省の報告がありました。社会福祉法人にも課税すべきではないかという意見も出ています。自立支援法は散々に不人気な政策だったわけ

ですが、その後の8年で障害福祉予算は倍増したのです。障害福祉サービス事業者も倍増、あるいはそれ以上に増えました。ですが先ほど申し上げたように、真にサービスを必要としている人たちのところに必要なサービスが十分に届いていないのです。

誰のための障害福祉サービスかと、手のあまりかからない人を奪い合うのが本当の障害福祉サービスではないと私は思うわけです。そしてこれは多くの社会福祉法人が利用者の福祉向上や、困難な課題にチャレンジするとか、職員の処遇改善等に充分取り組んでこなかったことが原因ではないかと考えています。3K職場と言われる福祉施設でなぜ3億円もお金が剰余金として残るのか、こんな不思議なことはない。そういう意味で、私たちは積極的に社会的ニーズに応じる使命があると考えています。非課税法人として優遇されているわけですから、剰余金を積み増していくのであれば社会福祉法人の公共性・公益性から見ても、果たすべき社会的役割を放棄していると言わざるを得ないと思えます。

○書籍名…自閉症の僕が跳びはねる理由  
 著者…東田直樹

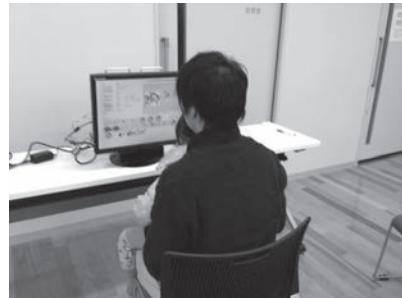
○書籍名…この地球(ほし)にすんでいる僕の仲間たちへ  
 著者…東田直樹・東田美紀  
 出版…株式会社エスコアール



ご清聴ありがとうございます。以上を持ちまして終わらせていただきます。  
 (第28回全国自閉症者施設協議会熊本大会リレートークを一部修正、加筆したものです)

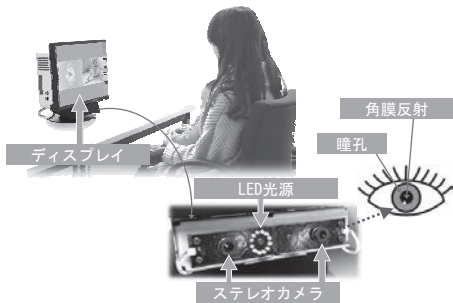
## Gazefinder (社会性発達評価装置) のデモンストレーションに参加しました

Gazefinderとは、JVCケンウッドが乳幼児の社会性発達評価を目的に大阪大学他と協同開発された装置で、ドライブシュミレータなどで活用されている注視点検出技術を応用したものです。具体的には、モニターに映し出される画像の注視点から社会性発達を評価することで、自閉スペクトラム症を乳幼児期に早期発見することを目指しており、佐賀市を始め、5つの市町村の1歳6ヶ月健診において実証実験中です。

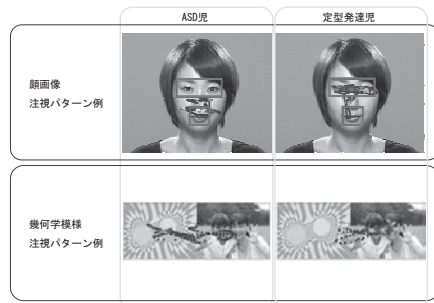


大分県内で開催されたデモンストレーションに参加したところ、自閉症スペクトラムの評価のみならず、周囲の刺激に反応しやすい特徴や、場面の切り替えが苦手な面など、こども一人一人の認知特性を確認できたことから、心理的な評価が深められる可能性を感じとることができました。また、検査が短時間で簡単であることから、こどもの才能支援に汎用できる可能性や、成人期の自己認知に向けたコンテンツを開発することなど、今後の展開にも話が膨らみ、本誌でも継続的にご紹介いただくことをお願いしています。

3-1 Gazefinderの構成



3-2 注視パターンの違い



# 平成26年度 発達障害支援スーパーバイザー養成研修 実務研修の受け入れから

障害者支援施設 あかりの家  
支援部長 亀山 隆 幸

あかりの家では、9月と10月と12月に各5日間、計15人の方を受け入れました。

受け入れに際し、色々考えたことなどについて報告的に触れてみます。

## 1 企画の段階でのあかりの家での確認

- ①(施設長が全自者協副会長という事もあって)成功に向けて最大限の努力をする。
- ②(自閉症総合援助センター(構想)を掲げる法人として)法人全体で取り組む。
- ③(この受け入れを機会に)より客観的で体系的な、施設と支援の説明言語を作り上げる。
- ④(この受け入れを機会に)地域等での支援者養成に乗り出す第一歩とする。
- ⑤(支援のプロたちに見られることによって)自分(達)の支援を客観的に見る機会とする。
- ⑥閉じたり飾ったりする説明は避け、オープンで率直な説明に努める。



## 2 企画の段階での課題等と対応

- ①駅から徒歩30分を要する移動手段 → 最寄駅とあかりの家との送迎を毎日行う。
- ②5日間の宿泊場所 → 宿泊可能人数は少ないが、地域交流ホームを提供する。
- ③研修プログラムづくり → 下記の通り
- ④和やかで率直な意見交換ができる雰囲気作り → 初日夜に懇親会を設定。お互いが言いにくいことの中に“支援の大事な要素”があるとの考えで、夕方の反省会を共に有意義な場とする。

## 3 実務研修プログラム

	9:00	12:00	13:00	13:30	14:30	15:00	15:30	17:00	17:30
9/8 (月)			受付	開講式・オリエンテーション(施設見学含む) 講義1「あかりの家の自閉症支援」				意見交換会	18:30～ 懇親会
9/9 (火)	臨床実習 あかりの家 (引継ぎ→ランニング→①ブラグ班、②トモニ活動)	休憩	事例検討ーリハビリ的ショートステイ		講義2「行動障害のある人たちへの支援ー自閉症療育のキーワード集を通してー」			まとめ意見交換	
9/10 (水)	①臨床実習 ワークホーム高砂 ②臨床実習 あかりの家 (引継ぎ→ランニング→ブラグ班、軽作業班、さをり班)	休憩	臨床実習 あかりの家(体操活動)		講義3「発達障害者支援センターにおける取り組み」発達障害者支援センタークローバー			まとめ意見交換	
9/11 (木)	①臨床実習 あかりの家 (引継ぎ→ランニング→軽作業班、割箸班) ②臨床実習 ワークホーム高砂	休憩	臨床実習 A市自立支援協議会「自閉症の方の防災支援」 地域生活支援センターあいあむ		臨床実習 障害児通所支援事業所あかりの家			まとめ意見交換	
9/12 (金)	臨床実習 あかりの家 ①トモニ活動、②ブラグ班、割箸班	休憩	閉講式・まとめ意見交換						

#### 4 研修プログラムの軸

##### (1) 強度行動障害のある方たちへの支援

###### (1) 行動障害のある自閉症の方たちを支援するチームづくり

強度行動障害の見られる方への支援の一つの鍵はチーム力。4月1日の全体会で、20年確認し続けている「あかりの家共通確認」（“土俵の外からの批判は迷惑”、“前向きな No を大切に”、“派閥は許さない”等）や「チームは支援力を高める過程で作っていく」研修体制などを紹介。

###### (2) 「あかりの家自閉症療育のキーワード集」を通じた支援の実践

10数年前より、「実践の中から得たエッセンスを言葉にし、つなぎ育てていく」ことを目的に、支援員は毎年原稿を提出し、編集者の施設長とやりとりを重ねミニ実践事例＝キーワードを完成させている。この自前の<実践言語><説明言語>を介して、行動障害のある方たちの支援のキーワードを紹介。

###### (3) 「リハビリ的ショートステイとその取り組み（事例検討）」

「水中毒状態にあった A さんの家庭復帰に向けたショートステイの取り組み」を取り上げる。あかりの家で“水に向かわなくて済む”“ゆったりとした状態”をつくることを目標に、①日常の行動のスピードを緩める、②力抜き、③指示に応じれる関係を作っていた事例を紹介。

##### (2) 臨床実習

###### (1) プラグ作業班

電子部品の組み立て作業。毎日、業者が集荷に来られるノルマや、精度の高い検品が求められる緊張感の中、10名の重度の自閉症の利用者が懸命に集中して取り組んでいる。そこから、自閉症の方たちの可能性を感じ取っていただく。

###### (3) トモニ活動

愛媛県のとモニ療育センターのSVを受けて、①課題学習（数字や時計やお金）と②料理づくり、を行なっている。「分かる」「できた!」という課題習得に加え、そのやりとりの中で利用者の見方が変わっていったり、支援員の幅を広げていく事を目的に実施。そのエッセンスを感じ取っていただく。

###### (4) 体操活動（ダイナミックリズム。膝立ち・寝かせ等の静止運動、前の利用者に続いての模倣運動他）

集団の力動的な面を活用して、“自分の身体が、自分でうまく動かしている”という実感を持ってもらう。そこで多動性の軽減を図ったり、支援者とうまくかみ合えた経験を積み重ねていく場面を見学。

#### 5 研修を終えて -参加者の声-

以下、事務局提出の実習報告の写しを送っていただいた方からの抜粋です。

「実践の臨床実習でも感じたが、あかりの家では非常に多くのスーパーバイズを受けている。自分たちの取り組みを様々な角度から多面的に検証している様子が伝わった。この『おごり』のない姿勢こそが、自閉症療育の基礎であろうと学び、反省する。特に重度の知的障害を伴う自閉症の人たちは、自分の生きにくさを自分で表現しにくい。その心に気持ちを寄せ、様々な視点から取組みを検証し、謙虚さと信念を持って実践を積み重ねている実践に感銘を受けた。」



この実習報告は回覧され、その表紙に「外交辞令があるにしても、我々以上に我々のことを知り、理解し、それを文章化している！ありがとうございます」と三原施設長のエンピツメモが書き添えてありました。

その他、幾つかの感想をあげてみます。

- ・「朝の引き継ぎそのものが、利用者の支援検討のOJTになっている。園長が問題提起をされ、ひとりの職員が発言すれば、次々と発言される。一人ひとりがしっかり取り組んでおられることを実感した。」

- ・「この仕事に携わり10年になるが、行動障害の軽減に向けた取り組みは、その行動だけに焦点を当ててるのではなく、「日常の支援の連続体である」という意味もよく分かりました。」
- ・「色々な事業所や活動を見せていただきましたが、入浴場面等も見せて欲しかった。」

今回の15名の方々の受け入れは、私たちにとっても、改めて自分たちの実践を客観的に捉えなおす機会となりました。いくつか指摘もいただきました。こういったやりとりは、やはり実務研修ならではの醍醐味だと思います。

また、私も受講生の一人ですが、実習を終えられた皆さんが各事業所で「どう動かれるか」という行動力が、真の発達障害支援スーパーバイザーに向け、問われるのだと思います。よい機会を与えて頂いてありがとうございました。



## 毎年4月2日は、世界自閉症啓発デー

日本各地で啓発活動が開催されます。



「象の親子」 浜ノ画 武生さん

**発達障害を知っていますか？**..... **自閉症を知っていますか？**.....  
 発達障害とは、自閉症およびアスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害（読字障害や書字障害を含む）、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能の障害であって、その症状が通常低年齢に於いて発現するもの（トレット症候群や吃音を含む）です。知的障害を伴っている場合もあります。 自閉症の人は自分の殻に閉じこもっているわけではありません。気持ちをうまく伝えることや、他人の言葉の意図を理解することが苦手ですが、純粋で一生懸命です。

**日本各地で啓発活動が行われます。詳しくはWEBサイトをご覧ください。**  
 WEBサイトでは、メッセージの募集や活動紹介を行っています。

世界自閉症啓発デー 日本実行委員会公式サイト <http://www.worldautismawarenessday.jp/>

**世界自閉症啓発デー2015 シンポジウム** パネリストはタカシロフ 絵巻作品展など

【共に支え合う 一人ひとりのつながりが大きな輪に！】

日時 **4月4日(土)** 10:00~16:30  
 会場 **全社協・灘尾ホール**  
 東京都千代田区露が関3丁目3番2号

参加を希望される方は、予約が必要で、上記記載の住所の郵便番号で日本実行委員会公式サイトからお申込みください。携帯電話やスマートフォン（QRコード読み取り機能あり）からの申込みもできます。

主催 厚生労働省 一般社団法人日本自閉症協会

**世界各地や日本各地でブルーライトアップが行われます。**

下記WEBサイトでも情報を検索できます。 ※ブルーは癒やしや希望などを表す色です。  
<http://happy-autism.com/liub.html>

**東京タワー ライト・イット・アップ・ブルー**

日時 **4月2日(木)** 18:30~22:00 (※9時) **日本電波塔株式会社**  
 会場 **東京タワー** 東京都港区芝公園4丁目2番8号

国立特別支援教育総合研究所 全国自閉症者施設協議会 日本自閉症スペクトラム学会 日本発達障害ネットワーク  
 発達障害者支援センター 全国連絡協議会 全国情緒障害教育研究会

お問い合わせ先 一般社団法人日本自閉症協会 TEL: 03-3545-3380 FAX: 03-3545-3381

## 自閉症スペクトラムのための総合保障のご案内

### ～ ～ ～平成27年度 保険加入をお考えの方へ～ ～ ～

皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。  
平成26年度より一般社団法人 日本自閉症協会のASJ保険(傷害疾病定額保険)となつてから、おかげさまで加入者数が6,000名を超えました。平成27年度4月1日より新年度を迎えるにあたり、保険のご加入を検討されてはいかがでしょうか。

#### ◆保障内容(概要) ・詳細はお問い合わせ下さい。パンフレット等をお送り致します。

病気やケガでの入院、ケガでの通院、個人賠償補償がセットされています!

(年度途中で加入の場合は加入希望月の前月20日が申込締切となり、翌月の1日から加入となります)

#### 【ASJ保険】

病気やケガでの入院	2日目から対象	
●入院保険金	1会計年度30日まで	
・付添介護費用	1日	8,000円
・差額ベッド費用	1日	5,000円
・入院臨時費用	1入院	5,000円
・入院諸費用	1日	1,000円
●死亡弔慰金		50,000円

#### 【AIU傷害保険】

ケガでの入院、手術、通院	初日から対象
●本人の傷害(ケガ)の補償	(入院・手術・通院)
●死亡・後遺障害保険金	
●他人への損害賠償金(対人・対物)	5,000万円まで補償

≪自転車事故で、法律上の損害賠償を負った際も対象になります≫

#### ◆年間加入掛金(保障期間は、毎年4月1日から1年間)

会員種別	年間掛金	内訳
●加入プラン A 日本自閉症協会正会員(加盟団体)の構成個人会員	15,900円	ASJ保険料 6,100円 AIU保険料 9,300円 年会費 500円
●加入プラン B 自助会員 (上記以外の方は申し込みにて自助会員となります)	16,400円	ASJ保険料 6,100円 AIU保険料 9,300円 年会費 1,000円

#### 【入院は2日目から対象になります】

薬の調整のための入院、精神科への入院、てんかん発作での入院、親不知抜歯のための入院、アトピー性皮膚炎での入院、骨折などのケガでの入院でも入院2日目から対象になります。

#### 【保険金を受け取られた加入者様の声】

- ・どうしても個室が必要な子供、差額ベッドの保険が出ることは安心した。
- ・今回の入院はいろいろな面で大変でしたが、保険金をいただいたことで経済面だけでも助かり、とても感謝しています。ありがとうございました。
- ・ASJ保険に加入しているおかげで、急な入院やあってほしくない事故等のときも心強いです。
- ・親が先に病気になるかも・とばかり考えていましたが、子供も40才を過ぎますと健康に気を付けていかなければいけないとしみじみ思いました。

#### ◆ お問い合わせ・お申し込み先 ◆ ☎ 03-5565-2020

〒104-0044 東京都中央区明石町6-22 築地二ツコンビル 6F

(2015年からビル名が変更となっています)

一般社団法人 日本自閉症協会内

FAX 03-5565-2021 営業日 月～金(土・日・祭日除く) 10:00～16:00

E-Mail : asj-hoken@autism.or.jp ホームページ : <http://www.autism.or.jp>

ASJ保険  
事務局

## 編集後記

一年目の発達障害支援スーパーバイザー養成研修が終わります。研修を受講された方、講師の先生方をはじめ、実習受け入れ施設の皆様、企画から取りまとめまで多忙な業務を行ってくださっている事務局の皆様、大変お疲れ様でした。

次年度も、全自者協の積極的な取り組みを、広報委員としても引き続きお伝えしてまいりますと思います。また、今号の発行に際し、ご協力下さいました多くの皆様方に感謝申し上げます。

編集人：宇治原